

ワークショップの記録

欧米諸国における 臨床心理学資格の実際とその歴史

日本心理学会第71回大会ワークショップ（於・東洋大学）
2007年9月18日（火） 16:00～18:00

企画・司会者：サトウタツヤ（立命館大学）

話題提供者：小林 亮（玉川大学）

下山 晴彦（東京大学）

滝野 功久（立命館大学）

松見 淳子（関西学院大学）

企画主旨

資格は学問と社会をつなぐメディア（媒介）の一つである。日本の臨床心理学関連資格のあり方を相対化して考えるためには歴史研究と比較研究が必要である。このWSでは企画者が日本の臨床心理学史を簡単に紹介した後、欧米のいくつかの国を例にとって臨床心理学の資格の内容や成立の過程や訓練のカリキュラムについて検討していく。イギリスについて下山が、ドイツについて小林が、フランスについて滝野が、それぞれの国における現地調査をふまえて報告を行う。これらの報告を受け松見が、アメリカの資格の状況もふまえて、文化的視点に配慮し討論を行う。各国の歴史的文化的な背景が資格制度の成立にどのように影響しているのか、資格付与機関のあり方は社会によって異なっているのか、費用は誰が負担するのか、資格は社会に対してどのような機能を持っているのか、などについて差異と共通点を考えていく。

〈はじめに〉

サトウ それでは、定刻になりましたのでワークショップ37、欧米諸国における臨床心理学資格の実際とその歴史というワークショップをさせていただきます。

私が企画と司会を担当する立命館大学の佐藤でございます。よろしくお願いいたします。

本日このような企画を行うに至った経緯というのを、本当にかいつまんでお話ししますと、実は、私を中心になって臨床心理学の歴史という科学研究費を取らせていただいております。科学研究費補助金「社会状況や海外学説との関連からみた本邦臨床心理学の歴史的展開」（基盤研究（B））です。その過程で、日本の臨床心理学の一大トピックが資格問題であるということは事実としてあるわけです。日本のことについてはある程度理解できたとしても、他の国と比較することでもっと分かることはあるように思います。私自

身、日本の臨床心理学の背景について、歴史を通じてわかってきたつもりではあるんですが、実際にほかの国はどうなっているんだろうかということも大変重要だと思うに至りました。ただし、その際には、単に資格の現状だけではなくて、それぞれの国の文化的背景であるとか、事実の背景をもとにして理解することが必要です。こうしたことについて、アカデミックな議論をしていかなければいけないということを先述科研費のメンバーの先生方におはかりしたところ賛同していただきまして、本日の企画開催となりました。

本日の登壇者の先生方について、ごく簡単にではありますが紹介させていただきます最初に玉川大学の小林先生でございます。先生にはドイツのことを話していただくわけですけども、ドイツにも行っていていろいろ調査していただきました。

2 番目、東京大学、下山先生でございます。下山先生はイギリスの臨床心理学に造詣が深く、あちらの学者を招いたり、また実際に行かれたりということになっております。

3 人目、立命館大学、滝野先生です。滝野先生はフランスで臨床心理学の訓練を受けてこれ、その事情についてお詳しい存在です。また2007年3月にもフランスに行っていて最新事情を見てきていただいております。

指定討論ということで、最後に関西学院大学の松見先生です。松見先生はアメリカで訓練を受けられたというだけでなく、長いこと実践家、教育家としてアメリカの大学で指導的立場にあられた方でございます。

以上の4人の先生方に現状とか歴史とかを披瀝していただいて、その上で実のある議論をできれば良いなと思っております。

話題提供の先生方には大体、20分前後ということでお願いしております。よろしく申し上げます。